

健康文化

## 十八歳未満、お断り

奥村 寛

平成10年1月18日、栃木県の中学校において中学1年生の男子生徒（13歳）がバタフライナイフで女性教師を刺し、殺害した。このニュースを聞いたとき、今までの私の考えを変えなければならないと思った。当時の少年の非行や家庭内での暴力をみていると、家庭での人間教育には限界があり、学校での人間教育に期待せざるをえない状態にあった。確かに、学校においても少年達は荒れてはいたが、教師が真剣に、命をかけて生徒に接していけば、生徒は教師を理解し、ついてくると思っていた。しかし、教師が死ぬ気で生徒に向かっていくと、殺されてしまうことを知った。これ以後、少年による殺害や傷害の事件は多くなった。最近の平成12年8月14日には、大分県で15歳の男子高校生が、一家6人を殺傷（3人殺害、3人重傷）する事件が起きた。少年は、「盗みの目的で進入したが、親にばれるのが怖かったので、一家全員を殺そうと思った」と、供述したという。平和な家庭の中にも、外から少年の殺害が入ってくる異常な現象である。これらの少年の犯行は最近数年の現象であり、以前には少なかった。現在、少年は心の中に何かの問題を持っている。

「最近の若い者は」とか、「我々の若い時は」という言葉はいつの時代でもあり、大人と若者の異なる世代の意識の違いを表わしている。若者はこの言葉を聞いて反発しながら大人へと成長してきた。また、この言葉は若者に対する大人の批判であるとともに、若者に対する期待の表現でもあった。若者は大人に反発をしていますが、若者の心は細い糸で大人の心と結ばれていた。しかし、最近のこの言葉は、大人と若者の断絶を意味する言葉となってきた。これは、大人が育った過去の時代と現在の若者が育っている時代が全く異なっていることによると思われる。大人の育った第2次大戦後の時代は経済的に貧しかった。その後の日本の経済は大きく変動した。社会も大きく変わった。1960年代の高度経済成長は生活水準を上昇させ、生活様式を豊かなものにした。エネルギー資源が石炭から石油になり、石油の占めるエネルギー源が第1位となった。

その結果、高度経済成長の前期には「三種の神器」と呼ばれた電気洗濯機、電気冷蔵庫、白黒テレビがどの家庭にも見られるようになり、後期には「3C」と呼ばれたカー、クーラ、カラーテレビが一般的になった。1973年に原油価格の大幅な引き上げとなって第1次石油危機（オイル・ショック）が発生した。国民全体が物不足になるという懸念から、トイレットペーパーの買占めに殺到するというパニックもあった。1979年に起こった第2次石油危機を含め、原油価格の上昇は10倍にも達した。ここで、石油の時代は限界があることが示され、景気が後退した。1987年（昭和62年）からバブル経済が始まり、再び景気がよくなった。しかし、1991年（平成3年）には幻の景気、バブルが崩壊し不況が始まった。その不況は現在まで続いている。この間に、1985年には電電公社（日本電信電話公社）は民営化してNTT（日本電信電話株式会社）となり、1987年には国鉄（日本国有鉄道）は分割・民営化してJR（旅客鉄道株式会社）となった。同時に、一般企業の倒産、吸収合併も始まった。

この社会の変化とともに、国民の価値観は多様化してきた。若者はTVゲーム、コンピュータ、インターネットをマスターし、時には大人以上の能力を発揮するようになった。また、禁欲よりも開放を求め、学ぶことよりも遊ぶことを求める若者が増えてきた。この現象によって大人と若者との間の価値観の違いがますます大きくなった。

このような時代背景から若者を観察していると、時には理解に苦しむ現象が見られる。すなわち、若者は言葉では自信のあることを言っているが、本当は自信のないことを心の中では知っており、態度では実力のあるようにしているが、本当は実力のないことを心の中では知っている。これは、若者は自分の弱さが表面に出ることがこわく、自分を強く見せることによって自己を守る自己愛のためであろう。残念なことに、自信や実力をつけたり、自分の夢を実現するには努力によって可能になることを知っていない。仮に、努力が必要であることを知っていても、努力しない。少年の自己愛の弱さが、次の行動として表われてくる。

他人と比較して、

- 自分は他人より、少し優れていること、
- 自分は他人より、少し特徴のあること、
- 自分は他人より、少しセンスのあること、

自分は他人より、少し知識のあること、  
自分は他人より、少し正しいことを発言すること、  
を表現して、自分の存在を他人に示す。

現代の若者は孤独である。携帯電話は若者の必需品である。一見、携帯電話で多くの仲間とコミュニケーションをとっているが、相手の目を見ながら話すことは少なく、心を開いて話すことも少ない。若者の世界では、他人を信頼したり、他人から信頼されたりすることが少ない。自己と他者との間に温かい関係がないため、場合によっては自己の利益のために他者を軽視し、無視することがある。結果的には自己を失い、「何故、自分が存在し、何のために生きるのか」と、問われても答えることが出来ない。この若者の問題は若者の中のみ原因があるのではなく、大人が持つ問題が若者に反映しているのであろう。では、この問題の解決はあるのか。簡単には解決は見つからないであろう。しかし、大人と若者の間に信頼したり、信頼されたりする関係を作ることから始めれば、解決の糸口が見つかるであろう。

(長崎大学医学部教授・原爆後障害医療研究施設)